

# 季節の風景 6月

## 夏越の祓

一年を二つに分けた昔の考え方では、6月晦日は前の半年の最終日にあたっています。大晦日が新年を迎えるための大切な日であるように、6月晦日も神に年の前半の無事を感謝して、収穫までの後半の無事を祈るための祓（はら）いの日と考えられたのです。

昔、宮中では6月晦日と12月晦日の年二回、「大祓（おおはら）い」の神事が行われていました。12月の方を「年越し」と呼ぶのに対し、6月の方を「夏越し」と呼んだのです。その起源は古く、701年制定の「大宝律令」に定められています。それは、大内裏（おおいんり）の朱雀院（すざくゐん）に天皇に仕える百官の貴族が集まって、国民が犯した罪を除き去るためにお祓いの詞をよみあげる儀式でしたが、やがて民間の神社でも行われるようになりました。年越しの祓いは普及しませんでした。夏越しの祓いは、夏の恐ろしい伝染病や水害などがあることから、広く庶民の年中行事となっていました。

夏越しの祓いの方法は、「茅の輪くぐり」と言っており、神社の境内に竹で作った直径2〜3メートルほどの輪にカヤを巻きつけたものが置かれ、それを参拝の人々がくぐることで、災難を防ぐことができると考えられたのです。

高知県では、「輪抜け様」と呼ばれ、全国的に見ても特に盛大に行われ、多数の屋台が立ち並び、多くの人々にぎわう夏の風物詩になっています。



## 今月の



大丈夫！できる！君ならできる！



たかはし さき  
高橋 沙希さん  
(茂串町)

都会の若者を地方に送り込み、地元若者をベースにした地方活性化を促す地方創生応援隊派遣会社「ファウンディングベース」のスタッフとして、昨年の12月末に千葉県市川市から四万十町にやって来た高橋さん。

生まれは東京。都内の高校を卒業後、明治学院大学国際学部に入學。大学では、国際学部というだけあって、言語に始まり、宗教・文化・歴史・国際関係など、海外のことを片っ端から学んでいきました。大学卒業後は、労働組合を



▲先生というより「お姉さん」

専門とするコンサルタント会社に就職。組合役員の人材育成や、職場環境の改善、従業員の満足度を上げるアドバイスなど、様々な角度からのコンサルタントを手がけてきました。もともと、ボトムアップで組織を変えていくという考え方が性に合っていたという高橋さん。労組という団体から会社や日本を変えていくという構図も、ボトムアップのひとつの形であると考えていたし、もとも、ボトムアップの構図自体が、ある種の挑戦と言えて、そんな「挑戦する人」がたくさんいる日本にしたいとも思っていました。

コンサルティングの仕事はとっても好きだったので、挑戦する人をもっと応援したいと考えていた時に「ファウンディングベース」と出会い「じゆうく。」のスタッフとして「自分自身も挑戦する」ことにしました。

だそうです。

「ここに来て思ったのですが、若者だけではなく、挑戦する人がまだまだ少ないように思います。当たり前のことですが、まずリスクを考えてしまうと、いうこともあるのかな。そう思うからこそ、若者たちの背中を押してあげたいと思います」と言う高橋さん。生徒たちに対しては、勉強を教えるというより、各々の良いところを探しながら、挑戦への階段を一緒に登っていきたくと考えています。また、生徒たちだけではなく、「一緒に「じゆうく。」を切り盛りしている協力隊のメンバーのモチベーションUPにも役立ちたい」とのことです。

## 現代美術家 村上隆さん 来町

4月30日、海洋堂かつば館に現代美術家、村上隆さんが、チーンソーアーティスト山本祐市さん（高知市）の企画展と実演に合わせて来館されました。当日は晴天に恵まれ、丸太を豪快にチーンソーで削り、可動式のカッパを20分ほどで制作した山本さんの早業を興味深げにカメラに収めていました。

村上さんは東京都出身の55歳。漫画やアニメをモチーフとした作風で、ルイ・ヴィトンのデザインや、カタルの東日本大震災への復興支援に感謝し制作した代表作「五百羅漢図」が世界的に有名な現代美術家です。

実演のあとは、大勢のファンの前で宮脇修会長と宮脇修二社長、山本さんを交えたトークショーを行い、軽快なトークの掛け合いで会場をわかせました。その中で、五百羅漢をモチーフとしたカッパ羅漢像の建立を提案され、宮脇社長らも快諾していました。

村上さんはかつば塾で、ふすま大の色紙にカッパの水墨画を即興で描き、かつば館へ寄贈されました。

